

2014年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

在宅療養中の胃瘻造設患者における経口摂取再開のケースの特徴と関連要因

学位の種類: 修士 (看護 学)

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号: 13894601

氏名: 青柳綾香

(指導教員名: 河原加代子 教授)

注: 1 ページあたり 1,000 字程度 (英語の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 ページ (A4 版) 程度とする。

【目的】

経口摂取は単に栄養を摂る目的だけではなく、患者の QOL 向上に密接に関わっている。近年口から食べることの重要性が社会的にも高まっているが、在宅における胃瘻の栄養管理の現状はわかっておらず、経口摂取再開にむけた取り組みの報告はあまりない。

本研究の目的は、在宅療養中の胃瘻造設患者の経口摂取を再開したケースの特徴を調べ、経口摂取の再開に関連する要因を明らかにすることである。

【方法】

1) 対象者は在宅療養中の胃瘻造設患者のケアを提供している医療介護に携わる専門職とした。2) データ収集は 2014 年 6 月 23 日から 9 月 29 日に実施した。3) 研究者が作成した構成化された質問紙に回答してもらい、そのあとに胃瘻造設患者の経口摂取再開のケースの経過とそのケースに関わった際の認識を自由に話してもらった。

【結果】

29 カ所の訪問看護ステーションより 45 ケースのデータが得られた。研究対象者の内訳は看護師が 83% で最も多く、言語聴覚士・理学療法士も関わっていた。

経口摂取を再開したケースの特徴は、1) 身体的な機能障害は重度であるが、意欲および認知機能障害は軽度であるケースが多かった。2) 食事摂取の姿勢や方法、起床の様子、発熱の状態等の項目で摂食状況のレベルとの関連が認められた。3) 経口摂取を再開するための取り組みには、家族や患者の希望がきっかけとなったケースが多かった。4) 医療介護専門職者によるアセスメントと専門職連携による経口摂取再開の取り組みがされており、患者の摂食状況のレベルが改善していた。

【考察】

経口摂取再開の取り組みと摂食状況のレベルの改善には、患者の心身の状況のみならず家族の意向や協力が大きく影響していた。摂食状況のレベルに関連が示された食事摂取の姿勢や方法、起床の様子、発熱の状態等の項目の確認と、家族の希望とどの程度協力できるかを把握する必要があると考える。さらに、きっかけとなる患者/家族の意向に耳を傾け、専門職によるアセスメントをした上で、在宅の多職種間で連携を取りながら経口摂取再開の取り組みを進めていく必要性が示された。

【結論】

経口摂取再開の取り組みによって 8 割以上の患者の摂食状況のレベルが改善していたことから、在宅療養中の胃瘻造設患者の経口摂取再開を検討する意義が高いことが示され、摂食状況レベルに関連のある項目の今後の有用性が示唆された。